

エンカウンター (ENCOUNTER)

第 176号

平成28年12月20日

編集・発行人 〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西 2-14-28 山口周三

電話 080-1232-0905

<http://encounter.agape.gr.jp/>

内村鑑三「続一日一生」より (8)

8月3日

主の言葉がわたしに臨んで言う、「わたしはあなたをまだ母の胎につくらない先に、あなたを知り、あなたがまだ生まれないときに、あなたを聖別し、あなたを立てて万国の預言者とした。」その時わたしは言った、「ああ、主なる神よ、私はただ若者にすぎず、どのように語ってよいか知りません」。しかし主はわたしに言われた、「あなたはただ若者にすぎないと言ってはならない。だれにでも、すべてわたしがつかわす人へ行き、あなたに命じることをみなに語らなければならない。彼らを恐れてはならない、わたしがあなたと共にいて、あなたを救うからである」と主は仰せられる。(エレミヤ書1・4-8)

責任は人をまじめにします。大人らしくします。神と人に対し敬虔の態度をとらしめます。責任は決して苦痛ではありません。人生の真の幸福は、責任を担わずしてこれを楽しむことはできません。責任に当たらずして、自分の内にある能力の程度を知ることができません。自分はいかほど強い者であるかは、責任を負わされて初めて知るのであります。ことに伝道上の責任は感謝して当たるべきで

あります。永遠の福音をゆだねられて初めて自分に永遠の生命の臨みしを感じます。この責任に当たらずして、福音の真個の価値はわかりません。人生実は責任ほど尊きものはありません。責任を避くのは愚の極であります。偉人とは別人ではありません。喜んで重き責任を担うた者であります。われら感謝して責任に当たって、他を益すると同時に自身の最大幸福を図るべきであります。

8月8日

こうして、あなたがたは、神に愛されている子供として、神になろうものになりなさい。また愛のうちに歩きなさい。キリストもあなたがたを愛して下さって、わたしたちのために、ご自身を、神へのかんばしいかおりのささげ物、また、いけにえとしてささげられたのである。(エペソ書5・1-2)

必ずしも大著述をなすに及ばない。小著述にて足る。われはわが見し真理を明瞭簡単なる文字につづりて、これを世に示すべきである。

必ずしも大事をなすに及ばない。小事にて充分である。われは神に送られて世に来たりし以上は、彼の造りたまひしこの地球を少しなりとも美(よ)くなして、天父(ちち)のもとへと帰り行くべきである。

必ずしも完全なるを要せず。不完全なるもまた可なりである。われは毎日毎時、わがなしうる最善(ベスト)をなして、患難(なやみ)多きこの世に少しなりとも慰めと喜びとを供すべきである。

「なんじ、おのれのために大事を求むるなかれ」(エレミヤ書45・5)
と、預言者エレミヤ、その弟子バルクを教えて言うた。大事のみをなさんと欲する者はついに何事をもなさず、完全のみを求むるものは何の得るところなくして終わる。何事をもなさざるは悪事をなす

のである。誠に偉大なるの一面は小事にいそしむ事である。完全なるの半面は不完全に堪うることである。大なれ小なれ、完全なれ不完全なれ、わが手に堪うることは力を尽くしてこれをなすべきである。(伝道の書9・10)。

8月9日

この人による以外に救いはない。わたしたちを救いうる名は、これを別にしては、天下のだれにも与えられていないからである。(使徒行伝4・12)

現代人の好むものは二つある。その一が芸術であって、その他のものが倫理である。そしてキリスト教にありて、芸術を好む者はローマ・カトリック教に行き、倫理を愛する者はプロテスタント教に行く。カトリック教は芸術的崇拜であって、プロテスタント教は倫理的願望である。されども福音すなわち真のキリスト教は、「キリストと、彼が十字架につけられし事」である。キリスト信者の全部は、キリストと彼の十字架においてある。彼の礼拝も道德も、すべてここに完成(まっとう)されたのである。ただキリスト、ただ十字架である。そしてただこれを信ずる事である。現代人はその単純なるに堪えない。倫理学者はこれを迷信と同視する。されども信ずる者には、これ神の知恵また能力(ちから)である。

8月10日

神は真実なかたである。あなた方は神によって召され、御子、わたしたちの主イエス・キリストとの交わりに、入らせていただいたのである。(コリント第1書1・9)

実に人の生涯に取り、イエスを知り彼を友とするほど、たいせつなことはない。そうして、これ、難(かた)いようで、いたって易いことである。キリスト教を信じ、キリスト教会に入ると言えば、いたってむずかしいようであるが、しかしイエスを友とすることは何人(だれ)にもなし得ることである。そうして彼と友誼を続ければ続けるほど、彼について深いことがだんだんとわかって来たり、べつに宗教や神学を研究するというにあらずといえども、人生の奥義がだんだんと彼によりて示されるのである。すなわち、彼がナタナエルに向かいて、

天開けて、神の使たち、人の子の上に上り下りするを見ん(ヨハネ伝1・51)

と言いたまいしごとく、われらは、イエスと聖父(ちち)との間に靈的交通の繁くして、彼にありて、まことに天が地に接し、神が人の間に現れ、現世と来世との間に強固なる架け橋の架せられて、人がこれによりて、ここよりかしこに達し得るの道の開けしことを見るのである。

8月13日

このキリストが、わたしたちのためにご自身をささげられたのは、わたしたちをすべての不法からあがない出して、良いわざに熱心な選びの民を、ご自身のものとして聖別するためにほかならない。(テトス書2・14)

宗教は、夢にあらず、現(うつ)にあらず、空空漠々として無限を瞑想することにあらず。あるいはまた特殊の心理状態に入りて、神を觀(み)、靈と交わることにあらず。宗教は魔法にあらず。妖術にあらず。靈感に触れて病を癒やすことにあらず。宗教はいわゆる奇跡にあらず。常識の人が常識をもって解し、感じ、実行しうることである。本当の宗教は最大の偉人を作った。最大の哲学者、最大の詩人、最大の政治家、最大の実業家はすべて熱心なる宗教家であった。日本人が今日まで唾棄して顧みざりしキリスト教がなかったならば、今日の立憲政体も、銀行制度も、哲学も、文学も、芸術も、教育もなかったのである。宗教はこの世の事ではないが、この世に関係のない事ではない。この世にきらわれながら、深く強くこの世を感化するものである。世に実は宗教ほど確実なるものはないのである。

8月19日

この朽ちる者が朽ちないものを着、この死ぬものが死なないものを着るとき、聖書に書いてある言葉が成就するのである。「死は勝利にのまれてしまった。死よ、おまえの勝利は、どこにあるのか。死よ、おまえのとげは、どこにあるのか」。

死のとげは罪である。罪の力は律法である。しかし感謝すべきことには、神はわたしたちの主イエス・キリストによって、わたしたちに勝利を賜ったのである。(コリント第1書15・54-57)

福音を信ずるの困難は少なくありません。あるいは10年、あるいは20年、あるいは30年、その探求に身をゆだねて、得るところはほとんど無きように感ぜらるる時があります。それがためには、世には嫌われ、財は失い、地位は捨て、多くの言い難き艱難に出会います。しかしながら、その報賞(むくい)は愛する者の死に遭遇して知られます。われらはもちろんその時歎きますが、しかし希望なき他の人のように嘆きません。われらの死別の歎きは絶望の歎きではありません。再会の希望を有する歎きであります。うるわしき涙の伴う歎きであります。…そうしてこのときにかかる経験を持つを得まして、数年にわたる信仰維持の苦痛はすべて十分に報われるのであります。恐怖の王なる死を慰むるに足るの慰藉、これを得るためには一生を費やしても惜しくはありません。キリストの福音を信ずるの利益は、特に死に際会したる時にわかります。

8月20日

さて、主にある囚人である私は、あなたがたに勧める。あなたがたが召されたのその召しにふさわしく歩き、できるだけ謙虚で、かつ柔和であり、寛容を示し、愛をもって互いに忍びあい、平和のきずなで結ばれて、聖霊による一致を守り続けるよう努めなさい。からだは一つ、御霊も一つである。あなたがたが召されたのは、一つの望みを目ざして召されたのと同様である。主は一つ、信仰は一つ、バプテスマは一つ。すべてのものの上であり、すべてのものを貫き、すべてのものの内にいます、すべてのものの父なる神は一つである。(エペソ書4・1-6)

われはこの地にありて、ひとり神を愛するにあらず。われは世界
許多の聖徒と共に神を愛するなり。わが身边に同情者なしとて、われ何をか恨まん。われは同情者を広く全世界に有す。真正のキリスト信者はすべて主にありて一体なり。祈祷はわがために地の四方より、天の宝座に向かって上がりつつあり。われらは大軍なり。主の指導の下に、同一事をこの世にありてなす者なり。われらはいかなる境遇にあるも、孤独、寂寥を感ずべからざるなり。

8月23日

あなたがたが新たに生まれたのは、朽ちる種からではなく、朽ちない種から、すなわち、神の変わることのない生ける御言によったのである。

「人はみな草のごとく、その栄華はみな草の花に似ている。草は枯れ、花は散る。しかし、主の言葉は、とこしえに残る」。

これが、あなたがたに述べ伝えられた御言葉である。(ペテロ第1書1・23-25)

聖書を教えよ。聖書を学べよ。聖書を教えて、独立（ひとりだち）の信者を作ることができる。聖書を学びて、教会は倒るるも独り立って倒れざる固き信仰を養うことができる。聖書は信仰の根本である。その生命である。聖書を中心とせざる宗教的事業は何時壊（くず）るるか知りがたいものである。聖書と親しみて、信者は神を離れんとするも、あたわない。深く根底を聖書の中にすえて、雨降り、大水出で、風吹きてその家を打てども、彼の信仰は倒れない。

教会をもって信者をつながんとするも益なし。教師の人格もまたもって彼の信仰を永久に維持するあたわず。聖書を教えよ。神のことばなる聖書を教えよ。

8月26日

だから、愛する兄弟たちよ。堅くたって動かされず、いつも全力を注いで主のわざに励みなさい。主にあっては、あなたがたの労苦がむだになることはない、あなたがたは知っているからである。(コリント第1書15・58)

人生短しと言えども、もし一つの事を続いて毎日少しずつなすならば、死ぬまでには一大事業を成就することができる。驚くべきは、毎日少しずつなす仕事の結果である。急に大事業を思い立ってなすにあらずして、毎日、降っても照っても、時を得るも得ざるも、こつこつとなすことである。この途をとって、凡才も大学者となることができる。毎日、一つずつの事項を暗記して、一生涯に大歴史家となることができる。毎日、天然物一個に注意して、一生涯には大天然学者となることができる。毎日、1章ずつ読んで3年と4カ月には聖書全部を通読することができる。これを生涯続けて、大聖書学者となることができる。「教訓に教訓を加え、規則に規則を加え、ここにも少しく、かしこにも少しく救う」(イザヤ書28・10)という。少しずつ教えられ、少しずつ生びて、何びとも大学者となることができる。少しずつ、しかり、少しずつ毎日少しずつ。静かに毎日、少しずつ。愛する日本人よ。

8月28日

だから、施しをするときには、偽善者たちが人にほめられるため会堂や町の中でするように、自分の前でラッパを吹きなすな。よく言うておくが、彼らはその報いを受けてしまっている。あなたは施しをする場合、右の手のしていることを左の手に知らせるな。それは、あなた方のする施しが隠れているためである。すると、隠れたことを見ておられるあなたの父は、報いて下さるであろう。(マタイ伝6・2-4)

善行をもって自己を世に示さんとするなかれ。世にキリスト信者の模範を供せんとてあせるなかれ。そはかくなして、神のみ心にかなう善行をなすあたわざればなり。善行に対しては消極的態度にいでよ。神をしてなんじにありて善行をなさしめよ。なんじは、ただなんじの内に臨みし光をおおわざらんことをつとめよ。聖霊を消さざらんことをつとめよ。なんじの虚栄と傲慢を絶ちて、全然神の器具たらんことを期せよ。さらば善行は自然になんじより出でて、なんじ無能者として世にみとめらるるも、神は大能者としてあがめらるるに至るべし。キリストの弟子たるものは、聖人たり、君子たるの野心をも絶つべきなり。ただ順良なる神の善行の器具たるを期すべし。しかしてかくなすことが実に人たるの最大名誉なるを知るべし。